

# 「疑古」と「信古」

——戴震「與王内翰鳳喈書」をめぐって——

井上 亘

はじめに

2006年3月、大東文化大学人文科学研究所より『諧声符引き古音検字表：附解説・図表』という書物を公刊した。これは、郭錫良『漢字古音手冊』（北京大学出版社刊、1986年11月第1版）に準拠し、その収録字と上古・中古・現代音の音韻データを、諧声符によって検索できるようにした字典で、これに中古音と上古音に関する解説を附した。その解説を書く過程で上古音研究の歴史にふれるところがあり、清朝の学者の音韻論を大変苦勞して読み漁った。その中で、戴震が「疑古」と「信古」ということについて大変興味深い考えを述べた文章を見つけたので、ここに彼の疑古・信古論を紹介し、この問題に関心をもつ識者の参考に供しようとおもう。

—

戴震（1724～1777）。漢儒を重んずる惠棟（1697～1758）らの呉派とならぶ清朝漢学皖派の巨匠で、その学統は「戴・段・二王」と称される段玉裁（1735～1815）、王念孫（1744～1832）とその子王引之（1766～1834）、さらに俞樾（1821～1907）、孫詒讓（1848～1908）へと連なる。その業績は、主著『孟子字義疏證』（1777年）をはじめとして多岐にわたり、また四庫全書の纂修官に挙人の身で拔擢されて、經部をはじめ多くの書の校勘を手がけたといわれる。<sup>(1)</sup>

戴震は20歳で江永（1681～1762）の門に遊び、33歳で上京、前年の進士の紀昀（1724～1805）や錢大昕（1728～1804）らの知遇をえて一躍名を馳せた。<sup>(2)</sup> 王

鳴盛（1722～97）あての書簡で、「光」一字の考証をもって「疑古」「信古」の立場を明らかにしたのはこの年であった。<sup>(3)</sup>

與王内翰鳳喈書 乙亥（乾隆二十年・1755年）

承示『書』『堯典』注、逐條之下、辨正字體・字音、悉準乎古、及論列故訓、先徵『爾雅』、乃後廣搜漢儒之說、功勤而益鉅、誠學古之津涉也。昨僕偶舉篇首「光」字、引『爾雅』「光、充也。」僕以爲此解不可無辨。欲就一字見考古之難、則請終其說以明例。

孔傳、「光、充也、」陸德明『釋文』無音切、孔沖遠『正義』曰、「光、充。『釋言』文。」據郭本『爾雅』、「桃、頰、充也。」注曰、「皆充盛也。」『釋文』曰、「桃、孫作光、古黃反。」用是言之、光之爲充、『爾雅』具其義。漢唐諸儒、凡於字義出『爾雅』者、則信守之篤。然如光字、雖不解、靡不曉者、解之爲充、轉致學者疑。蔡仲默『書集傳』、「光、顯也、」似比近可通、古說必遠舉光充之解何歟。雖孔傳出魏晉間人手、以僕觀此字據依『爾雅』、又密合古人屬詞之法、非魏晉間人所能、必襲取師師相傳舊解、見其奇古有據、遂不敢易爾。後人不用『爾雅』及古注、殆笑『爾雅』迂遠、古注膠滯、如光之訓充、茲類實繁。

余獨以謂病在後人不能徧觀盡識、輕疑前古、不知而作也。自有書契已來、科斗而篆籀、篆籀而徒隸、字畫倂仰、浸失本真。『爾雅』「桃」字、六經不見。『說文』、「桃、充也。」孫愐『唐韻』、「古曠反。」『樂記』、「鐘聲鏗、鏗以立號、號以立橫、橫以立武。」鄭康成注曰、「橫、充也。謂氣作充滿也。」『釋文』曰、「橫、古曠反。」『孔子閒居』篇、「夫民之父母乎、必達於禮樂之原、以致五至而行三無、以橫於天下。」鄭注曰、「橫、充也。」疏家不知其義出『爾雅』。「堯典」古本必有作「橫被四表」者、橫被、廣被也、正如『記』所云、「橫於天下、」「橫乎四海」是也。橫四表、格上下對舉。溥徧所及曰橫、貫通所至曰格。四表言被、以德加民物言也。上下言于、以德及天地言也。『集傳』曰、「被四表、格上下、」殆失古文屬詞意歟。「橫」轉寫爲「桃、」脫誤爲「光。」追原古初、當讀「古曠反、」庶合充霽廣遠之義、而『釋文』於「堯典」無音切、於『爾雅』乃「古黃反、」殊少精覈。述古之難如此類者、遽數之不能終其物。

六書廢棄、經學荒謬、二千年以至今。足下思奮乎二千年之後、好古洞其原、諒不僅市古爲也。僕情僻識狹、以謂信古而愚、愈於不知而作、但宜推求、勿爲株守。例以光之一字、疑古者在茲、信古者亦在茲。漫設繁言以獻。震再拜。

丁丑仲秋、錢太史曉徵爲余舉一證曰、「『後漢書』有『橫被四表、昭假上下』語。」檢之「馮異傳」永初六年安帝詔也。姚孝廉姬傳又爲余舉班孟堅「西都賦」、「橫被六合。」壬午孟冬、余族弟受堂舉『漢書』「王莽傳」、「昔唐堯橫被四表、」尤顯確。又舉王子淵「聖主

得賢臣頌」、「化溢四表、橫被無窮。」（洪榜案、『淮南』「原道訓」、「橫四維而含陰陽、」高誘注、「橫、讀桃車之桃、」是漢人橫・桃通用甚明。段玉裁案、李善注「魏都賦」引「東京賦」、「惠風橫被、」今本「東京賦」作「惠風廣被、」後人妄改也。<sup>(4)</sup>）

ここで問題とされているのは、『尚書』堯典のつぎの經文である。

曰若稽古帝堯。曰放勳、欽明文思、安安、允恭克讓、光被四表、格于上下。

下線部の「光」字が、この書簡の論題である。この下線部について、「孔氏傳」は、

允、信。克、能。光、充。格、至也。既有四德、又信恭能讓。故其名聞、充溢四外、至于天地。

といい、この傳に対して『正義』は、

正義曰、「允、信」「格、至」、「釋詁」文。「克、能」「光、充」、「釋言」文。在身爲德、施之曰行。鄭玄云、「不辭於位曰恭、推賢尚善曰讓。」恭、讓是施行之名。上言堯德、此言堯行、故傳以文次言之。言堯既有敬明文思之四德、又信實恭勤善能推讓、下人愛其恭讓、傳其德音。故其名遠聞、旁行則充溢四方、上下則至于天地。持身能恭、與人能讓、自己及物、故先恭後讓。恭言信、讓言克、交互其文耳、皆言信實能爲也。傳以溢解被、言其饒多盈溢、故被及之也。表裏、內外、相對之言、故以表爲外。向下、向上、至有所限、旁行四方、無復限極、故四表言被、上下言至。四外者、以其無限自內言之、言其至於遠處、正謂四方之外畔者。當如『爾雅』所謂四海、四荒之地也。先四表、後上下者、人之聲名、宜先及於人、後被四表、是人先知之、故先言至人、後言至于上下、言至於天地、喻其聲聞遠耳。

「禮運」稱、「聖人爲政、能使天降膏露、地出醴泉、」是名聞遠達、使天地効靈、是亦格于上下之事。

と説明する。ここで、「孔氏傳」にいう「光、充」が『爾雅』釋言篇の文と指摘されているので、『爾雅』を見てみると（カッコ内は郭璞注）、

桃、類、充也。（皆充盛也）

とあり、「光」が「桃」になっている。しかし、この箇所『經典釋文』を

見ると、

桃、孫作光、古黃反。類、古迴反。

とあって、異本（孫炎注本）では「桃」を「光」に作る本文があったらしい。以上から、「光」を「充」と解する根拠は、『爾雅』にあったことがわかる。

漢唐の諸儒は、『爾雅』にある字義はこれを信じて疑わなかった。だから、この「光」字のように、すっきりとはしないが、意味が通じないこともないものは、これを「充」の意に解したわけだが、このことは一方で学者に疑問を生じさせた。南宋の蔡沈『書集傳』に、

光、顯。被、及。表、外。格、至。上、天。下、地也。言其德之盛如此、故其所及之遠如此也。

とある解釈の方が、よほどすっきり意味が通る。漢唐の古説はなぜ『爾雅』のような古い解釈をわざわざ持ち出すのか。「孔氏傳」は魏晉の頃の偽書であるが、戴震の見るところ、この解釈のしかたは古人の筆法にかなっており、必ずや師師相伝の旧解であって、魏晉の人の能くするところではない。（宋代以降の）後の人は、『爾雅』の迂遠とこれに拘泥する古注を笑うが、そのように後人が徹底的に調べ上げるということをせず、軽々しく古説を疑い、何もわかっていないのに勝手な説を立てることこそ、戴震は問題だと考える。

文字は時代とともに変化する。『爾雅』にみる「桃」字は、そもそも六經の今本には見えない。『説文』に、

桃、充也。从木光聲。

とあり、（『説文』大徐本の当該箇所が付記された）孫愐『唐韻』には「古曠切（反）」とあるが、一方、『禮記』樂記篇に、

鐘聲鏗、鏗以立號、號以立橫、橫以立武。君子聽鐘聲、則思武臣。

とあり、鄭玄注はこの「横」字を、

横、充也。謂氣作充滿也。

と解する。また、『禮記』孔子閒居篇をみると、

孔子曰、夫民之父母乎。必達於禮樂之原、以致五至而行三無、以横於天下。四方有敗、必先知之。此之謂民之父母矣。

とあり、その鄭注もまた「横、充也。」と解している。この「横」と「桄」とは、たまたま「充也。」と同じ意味になっているように見えるが、樂記の「横」字は、『釋文』によると、「横、古曠反、充也。」とあり、この二つの字は同音同義であったことがわかる。疏家は、このような古注の解釈が『爾雅』にもとづくことを知らない。

だから、堯典の古本には「光被四表、格于上下。」を「横被四表」に作る本があるに違いない。「横被」とは広く被うこと、まさに上記の『禮記』孔子閒居篇にいう「横於天下。」や、同じく祭義篇に、

曾子曰、夫孝置之而塞乎天地、溥之而横乎四海、施諸後世而無朝夕、推而放諸東海而準、推而放諸西海而準、推而放諸南海而準、推而放諸北海而準。『詩』云、「自西自東、自南自北、無思不服。」此之謂也。

とある「横」がその意味である。<sup>(5)</sup> 堯典にいう「光(=横)被四表」と「格(=至)于上下」とは対偶をなして、あまねく及ぶことを「横」といい、貫通して至ることを「格」という。「四表」に「被」を用いたのは、徳を民と事物に広く施すからであり、「上下」に「于」を使うのは、徳を天地に及

ぼすので、そのようにいうのである。蔡沈の『書集傳』が先に引用した文につづけて、

蓋放勲者、總言堯之德業也。欽明文思、安安、本其德性而言也。允恭克讓、以其行實而言也。至於被四表、格上下、則放勲之所極也。

と言い換えているのは、古人の筆法から見て誤りであろう。

堯典の「横」字は、転写の間に「枕」と書かれ、さらに偏旁を脱して「光」と書かれるようになったのであろう。上古に遡れば、いずれも字音は「古曠反」で、字義もおおよそ広く遠くへと拡充する意で合致するが、『釋文』が堯典に音注を附さず、『爾雅』に「古曠反」とあるのは、明瞭を欠く。<sup>(6)</sup>とはいえ、秦の焚書で經書が壊滅的損傷を受けて以来、二千年。このような「述古之難」をいえば、キリがないことではある。

以上のような考証を述べ終わって、戴震は「疑古」と「信古」の問題に触れるのであるが、それは後にまわして、この「光」字の考証の後日談について述べておきたい。

## 二

丁丑年（乾隆二十二年・1757年）八月、錢大昕が戴震説を支持する一証を彼に示した。『後漢書』馮異傳に、

永初六年（102年）、安帝下詔曰、「夫仁不遺親、義不忘勞、興滅繼絕、善善及子孫、古之典也。昔我光武受命中興、恢弘聖緒、横被四表、昭假上下、光耀萬世、祉祚流衍、垂於罔極。予末小子、夙夜永思、追惟勳烈、披圖案籍、建武元功二十八將、佐命虎臣、讖記有徵。蓋蕭、曹紹封、傳繼於今。況此未遠、而或至乏祀、朕甚愍之。其條二十八將無嗣絕世、若犯罪奪國、其子孫應當統後者、分別署狀上。將及景風、章叙舊德、顯茲遺功焉。」

とある例である。また、姚鼐（1731～1815）もまた戴震に、

漢之西都、在于雍州、寔曰長安。左據函谷、二嶠之阻、表以太華、終南之山。右界褒斜、隴首之險、帶以洪河、涇、渭之川。華實之毛、則九州之上腴焉。防禦之阻、則天下之隴區焉。是故橫被六合、三成帝畿、周以龍興、秦以虎視。

という班固「西都賦」を示し、一証とした。さらに、壬午年（乾隆二十七年・1762年）の十月、この年四十歳になった戴震に、族弟の受堂が『漢書』王莽傳の、

莽復奏曰、「太后秉統數年、恩澤洋溢、和氣四塞、絕域殊俗、靡不慕義。越裳氏重譯獻白雉、黃支自三萬里貢生犀、東夷王度大海奉國珍、匈奴單于順制作、去二名、今西域良願等復舉地為臣妾、昔唐堯橫被四表、亦亡以加之。今謹案已有東海、南海、北海郡、未有西海郡、請受良願等所獻地為西海郡。臣又聞聖王序天文、定地理、因山川民俗以制州界。漢家地廣二帝三王、凡十二州、州名及界多不應經。堯典十有二州界、後定為九州。漢家廓地遼遠、州牧行部、遠者三萬餘里、不可為九。謹以經義正十二州名分界、以應正始。」

という例、および王子淵「聖主得賢臣頌」に、

故聖主必待賢臣而弘功業、俊士亦俟明主以顯其德。上下俱欲、驩然交欣、千載壹合、論說無疑、翼乎如鴻毛過順風、沛乎如巨魚縱大壑。其得意若此、則胡禁不止、曷令不行。化溢四表、橫被無窮、遐夷貢獻、萬祥畢湊。

とある例を示した。特に「王莽傳」の例は堯のことを述べているので、戴震は「尤顯確。」と自説の成立を確信している。

以下、彼の弟子等がこれを補足している。同郡の友人でもある洪榜は、『淮南子』原道篇に、

夫道者、覆天載地、廓四方、柝八極、高不可際、深不可測、包裹天地、稟授無形。源流泉滂、沖而徐盈。混混汨汨、濁而徐清。故植之而塞于天地、橫之而彌于四海、施之無窮而無所朝夕。舒之輒於六合、卷之不盈於一握。約而能張、幽而能明、弱而能強、柔而能剛。橫四維而含陰陽、紘宇宙而章三光。甚淖而潏、甚纖而微。山以之高、淵以之深、獸以之走、鳥以之飛、日月以之明、星歷以之行、麟以之游、鳳以之翔。

とあり、その高誘注に「横、讀桃車之桃。」とあることから、漢代において「横」と「桃」とが通用していたことは明らかなとする。また、段玉裁は『文選』魏都賦の李善注に引く「東京賦」の「惠風横被」という句が、今本では「惠風廣被」に作ることをあげて、後の人の「妄改」だと言う。要するに、「横」と「桃」との字音上の関係、「横」と「廣」との字義上の関係が補強されたわけである。

こうしてみると、戴震説はほとんど定論のように思われるが、これを王引之が批判した。<sup>(7)</sup> 彼は戴震の所説を要約した上で、

光・桃・横、古同聲而通用、非轉寫譌脱而爲光也。三字皆充廣之義、不必古曠反而後爲充也。

と述べ、以下、「光被」の用語例を多数挙げて「光非譌字可知。」とし、「光」を「充」と訓じた例を挙げて「與横初無異義也。」とし、また、「光」を「廣」「遠」の意味に用いた例を挙げて「光與廣亦同聲。」「光與廣通、皆充廓之義、『方言』曰、「幅廣爲充、」是也。」として、だから「廣被」という例も少なくないのだとした上で、つぎのようにいう。

則光被之光作横、又作廣、字異而聲・義同、無煩是此而非彼也。至光・格對文、而鄭康成訓光爲光耀、於義爲疏。戴氏獨取「光、充也」之訓、其識卓矣。

おそらく戴震の説は非常に有名であつたのだろう。例の博引旁証とはいえ、この王氏の批判は大変慎重でありかつ徹底している。彼の考証によって、「光・桃・横」三字の通用は立証されたといつてよかろう。

しかし、私の見るところ、これは実は戴震説批判になっていないと思う。戴震がなぜ「横」字にこだわったかといえ、それは「格于上下」がタテの広がりをするのに対して、「横被四表」がヨコの広がりをすると言つて看破したからであろう。そこに、この堯典の本文が「横」字でなくてはならない内在的な

理由があると彼は考えたのであって、これを「光」でも「廣」でもかまわないと言ってしまつては、戴震の論文をまったく理解できていないと言われてもしかたがないのではないか。

たとえば、戴震が傍証とした『禮記』孔子閒居篇の一文は、新出の出土文献にも見えていて、上博楚簡の「民之父母」篇には、つぎのようにある。<sup>(8)</sup>

孔子答曰、「民〔之〕父母乎、必達於禮樂之原、<sup>(9)</sup>以致五至、以行三無、皇于天下。」

(簡1～2)

このように、簡本は孔子閒居篇の「横」字を「皇」に作る。「皇」の上古音は匣母陽部、「横」も匣母陽部でまったく同音である。「皇」にも「大」「煌煌」あるいは「盛貌」「美貌」といった字義があるので、<sup>(10)</sup> 如字に読むこともできる。しかし、ここは「横」と読為すべきことは、その下文を見ればすぐにわかる。

孔子曰、「三無乎。無聲之樂、無體〔之〕禮、無服之喪、君子以此、皇于天下。傾耳而聽之、不可得而聞也。明目而見之、不可得而見也。而得既塞於四海矣、此之謂三無。」(簡5～7)

すなわち、再び「皇于天下」をくりかえし、これをその下文で「塞於四海」と言い換えていること、また「不可得而聞也」「不可得而見也」というものを、「大」とか「煌煌」などと認識できるはずがないということ。したがってここは「皇」と如字に読むべきではなく、「充」の字義をもつ「横」が本字で、「皇」は仮借字と見なくてはならない。

くりかえすが、戴震は『尚書』堯典の「光」字が「横」でなければならぬ理由を論証したのであって、「光」「横」両字が通用できたことを論じたのではない。確かに「光」を「横」の譌字とする根拠はとぼしいが、通用する文字のいずれが本字であるかは、最終的には文脈の把握によって決定され

るものであろう。(11)

王引之はこの作業を放棄しているように思われるのである。たしかに彼は戴震の「光・格對文」の説にふれて、「光被四表」を「光耀」の意に解した鄭玄の訓詁を「於義爲疏。」と批判し、「充」の意とした戴震説を「其識卓矣。」と評価している。しかし、戴震の真意を解しない王氏もまた、「於義爲疏。」と言われねばならないのではなかろうか。

### 三

以上のような考証をふまえた上で、戴震は「疑古」と「信古」ということを論じている。いま一度、その言葉を掲げておこう。

僕情僻識狹、以謂信古而愚、愈於不知而作、但宜推求、勿爲株守。例以光之一字、疑古者在茲、信古者亦在茲。

ここで、「信古」は戴震自身の立場をいい、「疑古」は「不知而作」の「後人」をさしていることは明らかである。このことは、「余獨以謂病在後人不能徧觀盡識、輕疑前古、不知而作也。」と上文にあることでもわかる。

しかし、ここで注意しておくべきなのは、戴震が信じているのは『爾雅』の訓詁であり、漢唐の古説であって、『尚書』の本文そのものに対しては、無批判に信じてはいないということである。このことは、「自有書契已來、科斗而篆籀、篆籀而徒隸、字畫俛仰、浸失本眞。」といい、「六書廢棄、經學荒謬、二千年以至今。」といていることから明らかである。その意味では、これは「疑古」とも言いうるのであって、問題は「不能徧觀盡識」「不知而作」というところにこそある。つまり、「宜推求、勿爲株守。」ということが最も重要なのであって、このばあい、「疑古」と「信古」に決定的なちがいはない。したがって、「例以光之一字、疑古者在茲、信古者亦在茲。」という言葉は、「疑古」と「信古」とを対立的に例示しながら、その対立を超えたところにある「述古」の本質を語ったものと理解すべきであろう。晩年の彼

は言う。

僕以爲、考古宜心平。凡論一事、勿以人之見蔽我、勿以我之見自蔽。

この言葉を載せる「答段若膺論韻」<sup>(12)</sup>という書簡は、はじめに紹介した『古音検字表』の解説でくわしくとりあげた。<sup>(13)</sup>そこで私は、戴震が古韻分部に音声学の知見を導入したこと、「陰陽対転」説の基礎理論を提示したこと、『切韻』（『廣韻』）と『詩經』の相対化の三点を高く評価した。彼は古韻を収喉・収鼻・収舌齒・収唇の四音に分類した。これは、古韻分部に調音点という普遍的な音理を導入したことを意味するとともに、清朝分部史を飛び越えて二十世紀の音価推定の段階に踏み込んでいたことを物語る。また、段玉裁の「異平導入」説を発展させた「陰陽対転」説（正確には「陰陽表裏」「同入相配」説）はそれまで『切韻』の分類に依拠していた古韻分部に新たな分類基準を与えた。そして、これら二つの理論をもって古韻分部を進めるべきであって、『詩經』の押韻資料だけで分部すべきではないとした。<sup>(14)</sup>これは一般に、実証性・客観性を重んずる段氏に対し、戴氏の独断的な主観性をあらわす点などといわれるが、<sup>(15)</sup>私はそうは思わない。戴震は、『詩經』に偶然残された通押例によって古韻を分部する不確実性を担保するために普遍的な理論を立てた。つまり、必然から偶然を識別して本然を捕捉しようとしたのであって、これはまさしく科学的思考というべきである。<sup>(16)</sup>

このような書簡の内容を踏まえる時、上記の「考古においては心の平静を旨とし、全ての先入観を排除せよ」という彼の言葉は、近代的自我の確立、すなわち近代理性について述べていることがわかるだろう。これに関連して、面白い話がある。<sup>(17)</sup>

先生生而體貌厚重、性端嚴。生十歲乃能言。就傳讀書、過目成誦、日數千言不肯休。授『大學章句』右經一章以下、問其塾師曰、「此何以知爲孔子之言而曾子述之。又何以知其爲曾子之意而門人記之。」師應之曰、「此先儒子朱子所注云爾。」卽問、「子朱子何時人也。」曰、「南宋。」又問、「孔子、曾子何時人也。」曰、「東周。」又問、「周去宋幾何時矣。」曰、「幾二千年矣。」又問、「然則子朱子何以知其然。」師無以應、大奇之。

つまり、彼は十歳余りの若さで「思孟学派」の問題点を喝破していたわけである。

要するに、『尚書』の「光」字の考証を通じて見せた「推求」の徹底、言い換えれば実証主義的方法と、『詩経』の相対化において見せた科学的思考と近代理性、これらが彼のいう「述古」ないし「考古」の本質であるといえよう。

### おわりに

近年、とくに出土文献の研究が進展するにつれて、「疑古」と「信古」ということが盛んにいわれている。戴震が生きた十八世紀と二十一世紀の現代とでは、「疑古」と「信古」の意味合いは当然ちがう。にもかかわらず、戴震の手紙には現代にも通底する基本的な問題が語られているとおもう。

私が理解しているところを要約すると、ここにいう「疑古」派は、東アジアの近代化という歴史的背景のもと、近代理性の精神と実証主義的方法とをもって古史の科学的研究を推進した学派であり、「信古」派は現代社会の高度情報化と世界経済のグローバル化を背景に、新出の出土文献とこれに古文献を突きあわせる二重証明法とをもって古史の書き換えを推進する学派である。そして一般に、前者には新出資料の知見がなく、後者には科学性・実証性ととぼしいといわれる。<sup>(18)</sup>しかし、新出資料も科学性も不可欠なものであることはいうまでもない。

戴震が「疑古」と「信古」を対比したのは、「述古」「考古」の本質を際立たせる一種の反語だと述べた。言い換えれば、両者が対立するのは「信古而愚」と「輕疑前古」という段階での話であって、「述古」「考古」の本質はそのいずれにもない、ということである。これと同じことが現在でも言えるのではないか。つまり、近代理性の批判精神と科学性・実証性とをもって古文献と出土文献の研究を推進することが最も重要なのであって、事の本質は戴震が語り、やって見せたこととあまり変わらないのではないか。<sup>(19)</sup>彼の考証の是非もまた、新たな資料にもとづいて検証されるべきことは言うまでもな

いことである。

〈附記〉本稿は2006年10月、中国の山東大学で開催されたシンポジウム「上古史重建的新路向：暨『古史辨』第一冊出版八十周年国際學術検討会」での報告（中文）をもとに成稿したものである。このシンポジウムの席上、「現在『信古派』といわれる人々はみな自らを『信古派』などと思っていない」など、いくつかの有益な指摘を受けたが、本稿の主旨はあくまで戴震の疑古・信古説の紹介にあり、私自身が疑古・信古あるいは積古をめぐる論争に容喙するつもりもなければ、戴震をこれに参戦させる意図もない。

- 
- (1) 段玉裁編：「戴東原先生年譜」（中華書局校点本『戴震文集』所収）236～238頁参照。
  - (2) 同上「戴東原先生年譜」221頁、洪榜「戴先生行状」（前掲書所収）255頁参照。
  - (3) 同上「戴東原先生年譜」221～222頁参照。
  - (4) 前掲『戴震文集』46～47頁。なお、引用にあたり、句読点を日本式に改めるなど、最小限の手を入れた。
  - (5) 周知のごとく、ここに引用した『禮記』祭義篇の文は『大戴禮記』曾子大孝篇にほぼ同文があり、そこでは「溥之而横乎四海」を「衡之而衡於四海」に作る。両字とも上古音は匣母陽部で、「合從連衡」というように、「衡」には「横」の意味がある。以下に述べるように、ここで戴震がいうのは、「光被四表」が水平面（ヨコ軸）、「格于上下」が垂直方向（タテ軸）をあらわすということであるから、この経籍異文は戴震にとって有利な所見といえる。
  - (6) 『廣韻』の反切下字でいうと、「曠」は宕韻（唐韻去声）、「黄」は唐韻で、韻母は同じだが四声が異なる。『廣韻』によると「横」字は「戸盲切」、つまり匣母庚韻に読むのが通例で、唐韻と庚韻とはいわゆる「攝」が異なり、また「古曠反」の声母は見母であるから、声母も韻母も違うことになる。しかし『廣韻』でも、「横」の異

読・又音が「光」「桃」とともに「古黄切」および「古曠切」の小韻にあり、また上古音でいえば、これら三字は陽部の牙喉音であるから、もとより仮借可能である。戴震が「追原古初」とか「殊少精覈」というのは、念のためのことで、大した問題ではない。

- (7) 『經義述聞』(江蘇古籍出版社影印、2000年9月) 卷三。
- (8) 馬承源主編『上海博物館藏 戦国楚竹書(二)』(上海古籍出版社、2002年12月) による。この「民之父母」篇について、日本では西山尚志氏が詳細な訳注を公表されている。西山尚志「上海博楚簡『民之父母』譯注」(『出土文獻と秦楚文化』創刊號所収。2004年)
- (9) 簡文「原」字については議論があるが、今は何琳儀「滬簡二冊選釈」(簡帛研究網站2003年1月14日)の説にしたがっておく。
- (10) 『經籍纂詁』(中華書局影印、1982年) 卷二十二、『故訓匯纂』(商務印書館、2003年)などを参照。
- (11) これは実は、王念孫が王引之に語ったことでもある。「詁訓之指、存乎聲音。字之聲同・聲近者、經傳往往假借。學者以聲求義、破其假借之字、而讀其本字、則渙然冰釋。」(『經義述聞』王引之序)
- (12) 前掲『戴震文集』76頁。「答段若膺論韵」は丙申年、乾隆四十一年・1776年の書簡で、戴震の死の前年にあたる。
- (13) 前掲拙著『古音檢字表』167～171頁。
- (14) いうまでもなく、この段階では段玉裁によって「諧声符」という新たな資料が古韻分部に導入されていた。ここはあくまで『詩經』の問題について述べているのである。
- (15) 陳復華・何九盈『古韵通曉』(中国社会科学出版社、1987年) 24頁。
- (16) 周知のごとく、戴震は若くして天文曆算に長じ、四庫全書館の5年間では、「算學(經)十書」の校定に最も心血を注いだという。この科学的思考が、彼の学問の基礎にあるのだろう。
- (17) 前掲「戴先生行状」251頁。
- (18) 私の念頭にあるのは、出土文獻や古文獻に見える思想内容を、子思や孟子など歴

史上の人物の絶対年代に対応させて考える一派のことであって、このような考え方を取らない学者も勿論いる。

- (19) 「近代理性」などというと、いかにも古くさい感じがするが、現代において、これを超えた「現代理性」と呼びうる認識主体が果たして確立されているのだろうか。